

もうだいぶ前のことですが、熊本で教区の信徒研修会がありました。そして、今日の福音書「ぶどう園と農夫」の箇所を、参加者がいくつかのグループに分かれて、話し合ったことがありました。

私は教役者のグループでしたが、ある司祭が、私など思っても見ないような考えを主張し始めました。「このぶどう園の主人は悪いやつだ。農夫たちに仕事をさせて、収穫だけ自分のものにしようと、僕たちを遣わす。こんな主人に向かって、農夫たちが立ち上がったのは当然だ。」と言うのです。

ぶどう園の主人というのは、神様のことをたとえて話しているのですから、神様が悪いなどと言ったのでは、聖書のお話が、最初からつぶれてしまいます。しかし、もしこの話を、一般の社会で話したなら、やはり、ぶどう園の主人が悪い、という意見が出てきても仕方がないのかもしれない。

みなさんは、今日の福音書の農夫たちと主人の話をどのように考えられますか。

ぶどう園の主人が、自分の作ったぶどう園を農夫たちに貸して旅に出ます。そして収穫の時に僕を送ると、次々ひどい目に遭わされ、最後は息子を派遣したのに、農夫たちは、息子をぶどう園の外に放り出して殺してしまった、という話です。

この「ぶどう園と農夫」の話というのは、その前に読んでいただいた、今日の旧約聖書が前提になっているのだと思います。今日の旧約には「ぶどう畑の歌」という見出しがあって、最初の1節と2節で「わたし」というのは、預言者のことです。イザヤということになりますね。そして、「わたしの愛する者」これが神様であって、3節からは、その神様自身が「わたし」と自分のことを語っています。

神様はぶどう畑であるイスラエルの土地に、イスラエル人をぶどうのように植えて、大切に世話をしたのですが、イスラエルの人々は、神様の期待に応えず、酸っぱいぶどうになってしまったので、もう捨てるほかはない、というわけです。

このぶどう畑の歌の話が、今日のたとえ話を聞く人々の頭には、予備知識として入っていたわけです。今日の福音書では、酸っぱいぶどうが実ったのではなく、そこで働く労働者が主人に逆らった、ということなんですが、主人の願いどおりにはぶどう園が運営されていないことは同じでしょう。そして、神様が育てたイスラエルに、最後はイエス様が遣わされたけれど、十字架にかけて殺されることを語っているのは明らかです。

しかし、そのような神様の人類に対する救いの歴史、という風に考えてしまったら、それで終わってしまいます。もう少し、この主人に逆らった労働者たちのことを考えましょう。このたとえ話の中身に、もう少し触れて行く必要があります。

主人は神様のことだ、と決めつけるのは、もう現代では難しいかもしれません。主人も僕もどちらも人間だと思って見てゆきましょう。

今日のたとえ話は、ぶどう園の主人の財産を預かっている農夫が、それを自分のもののように「考え違い」をしてしまったところにあるのではないかと私は思うのです。

今日のたとえ話を、単なる雇い主と労働者の話としたなら、収穫は雇い主のものだ、と決め付けた時、それは資本主義になります。また、いや収穫は労働者のものだ、と決め付けたなら、それは社会主義か共産主義ということになるでしょう。そのようなイデオロギーの考え方でこのたとえ話を見る見方もありますが、20世紀の終わりに、社会主義が否定されました。

3年前辞職し、その後昨年殺された安倍総理が日銀と組んだアベノミクス。日本の景気を良くした、と言われますが、儲かっているのが大企業の事業主だけであることを見る時、わたしたちは、収穫が、主人のものだと主張するのには、抵抗が出てきます。資本主義と言うより、新自由主義と言った方がいいかもしれません。これによって、わずかな金持ちと大勢の貧しい大衆ができてしまったのです。

今日の旧約聖書には、『イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑』（イザヤ5・7）という言葉が出てきました。イスラエルの家とは何でしょうか？

教区報や神戸教区の神学塾テキストにも書きましたが、最近の考古学の研究で、イスラエルという民族は、よそからやって来た人々ではなく、元々現在イスラエル共和国がある、カナン地方の貧しい人々だったようです。カナン地方は西のエジプトの影響下にありましたが、ここに都市国家が点在しており、それぞれの町では、金持ちが大勢の貧しい人々を支配していたのです。このような抑圧される生活に我慢できず、貧しい人々が立ち上がって、革命を起こし、金持ちの家を焼き払って、そこから出て行きました。そして、東の丘陵地帯に、自由で平等な共同体を作ったのが、「イスラエル」民族らしい、とわかって来たのです。そこには特権階級などなくて、権力者を擁護するような偶像も捨てられていきました。そんな中から、神様はただひとりで、人間は平等に神様から作られた存在であり、自由で平等なんだ、という唯一神信仰が生まれたと言われています。

ところが、そのようなイスラエルの家である農夫たちに、間違った考えが出てきてしまった、というのが、今日の福音書だろうと思います。

それは、イスラエルの家が、神様のことを忘れ、自分たちの共同体を勝手に運営できると思ってしまったことです。彼らは、それらのものを他から預かっている、という視点を持つ必要があったのです。

主人を神様と考え、そのまま事業主に結び付けるのは、現代の問題として、たとえに使うのは良くないのかもしれません。神様からではなく、のちの人類、子孫から預かっている、と考えたらどうでしょうか。

現在の環境問題について、私たちクリスチャンは、創世記の最初を引用して、神様の造った世界を管理する責任がある、という言い方ができますが、アメリカの先住民の酋長は、現在の自然は「子孫たちから預かっている」と言いました。今の美しい環境を子孫たちに汚さないまま返さなければならない、と言ったのです。

私たちが環境の問題を語る時、「神様から預かっている」という言い方では、とても現代人に通用しないでしょう。現代人は、ある意味で神様からは独立して、自分たち人間が地球の運命を決定する権利があると思っているのです。原発を再稼働することなどは、その代表的なものでしょう。

しかし、これが、神様ではなく、その代わりに、子孫たちのため、子孫たちから預かっている、という言い方をする場合、聞く人たちも、自分を越えた、大きな力や、人類の目的を考えるのではないか、と思ったりします。

私は、聖書のお話をそのまま現代人に「神様」という言い方で語ることは難しいと考えています。でも、子孫から預かっている、という言い方なら、素直に受け入れられるのではないか。そんなことを考えるのです。

後は蛇足ですが、今から59年前、1964年10月10日に東京オリンピックが開かれました。その時、私は保育園に通っていて、何も知らないまま、五輪の旗の絵を描かされていました。2年前のオリンピックは全く印象がありません。

ところで、オリンピックなどに選ばれた選手が、良い成績をだすために奮い立たせる方法が歴史的にいろいろ考えられてきました。昔は、日本のため。国のために奮い立つ、ということがありました。しかしこれでは、圧力を感じてしまって、本人に負担が大きすぎる。そのために十分力が発揮できない、という問題が起って来たのです。

ところが、そのあと、「自分のために頑張る」ということが強調されました。しかし、それでは、私が満足すればいいのなら、この程度にしておこう、と言って、あまり力を出す気持ちがなくなった。それで、最近の圧力のかけ方、というのは、「あなたを応援してくれている友達のために頑張る。」というのが一番いいことになっているそうです。

これと同じように、私たちが働くのは「神様の栄光のため」と言ったのでは、神様を信じない人々には通用しない。しかし、自分のために働くのであれば、「私はそこまで無理する必要もない」とか言ってしまいうし、自分の時代が幸せであればいい、という刹那的な考えになってしまいます。そこで、やはり私たちは、もっと後の人類たちのため、子孫たちのために働く。親しい人の子孫のため、という立場に立つ時、私たちは力を出すことができるのではないか、ということです。

私たちは目に見えない神様の栄光のために働くのですが、それは自分を越えた大きな存在への責任だという風に考え、その大きな存在のひとつに、のちの世にこの世に生まれて生活する人々のためだ、という言い方も通用するように思えました。

私は今年何度もお葬式をして、人間の価値の評価を①自分の人生に、喜びを見出せたか？②他人の人生に、喜びを与えられたか？という問いをエジプトの伝説を引用しますが、2番目の他人の人生とは、ただ自分と一緒に住む者だけでなく、時間空間を越えた、人びとのために生きる視点をもつべきだとおもうようになってきました。